

正岡子規の評

或は曰く、満腔詩文の想を懐き、日課役々の中に洒々落落たるは余輩正岡君に於て之を見る。是才智あり且大胆なる者にあらざれば能はざるなり。儲君さての性質に至ては別に非難すべきなく、且之あるも爰こゝに詳論するの限りあらざるなり。唯君は才子を以て自ら許すものの如し。君の才子たることは同友中等しく許す所なれども、才子才を以て身を誤るの鄙諺ひげんもあれば、左様に才子気取りは反て君の為に悪しからんと余輩の老婆心。

或は曰く、其担の小なる俗に所謂家いわゆるの前の弁慶を働くを以て見る可し。何を以て子を目して家の前の弁慶、即ち影弁慶なりやと言ふに、元来子に付着する一種の病あり。此の病は俗に所謂我儘なるものなり。己を知らざるもの対して論ずるも、威張るも、無益無効の親玉と思意して然るか。然り。而して子は又篤実人とくじつを喜ばしむる所あり。而して其才たるや文字状の才にして究理の才にあらざるなり。後世或は文墨を以て名を挙ぐるも、真説を以て名を挙ぐるは難きことかと思ふなり。尚、君の為に取るべからざる一事あり。そは又何ぞや。曰く小成に安んずるの気。

或曰、子は詩作者にして歌詠家と化し、歌詠家にして俳諧者に變じ、文章家にして小説家を擬し、人に対して間の合はざるなり。其の博識多才、子が自ら誇り、我儕わなみが亦信じて疑はざるところなり。而して子が属する所の詩文中に奇語絶句を含むと雖も、未だ之を以て高等に達する能はざるは何ぞや。曰く子が担小にして詩文自ら其勢を失ふを以てなり。子が小なるもの独り担のみならんや。氣も亦小なり。今此を此せんに余は子を守門の犬の如しと言はん。常に家にありては能く人を評して能く賤む。而して聚衆じゅしゅうの処に於ては即ち尾を垂れ耳を俯ふし、敢て一言の言ふことなく、学校生徒をして婦女子の如しと言はしむるに至る。子が性淡泊なり。然れども子が為す所多く淡泊に過ぐ故に損すること屢々しばしばあり。